

松	梅	榎	敷	猿田彦神社	猿田彦命	不詳
都	下	四	十	猿田彦神社	〃	不詳
渡	田	坊	坊	天満宮	管原道具	〃
城	文	天	満	宮	文珠菩薩(モンジュボサツ)	〃
	珠	満	宮			

二 町内の神社について

大和町で神社と称するもの六十一社を挙げたが、この六十一社の祭神は九十一神でこれを大別すると皇祖神系が五十七神で三十四神が人格神である。

皇祖神系というのは、日本の国土創生に関係のある神々で、天之御中主・高皇産靈・神皇産靈・イザナギ・イザナミ・天照・スサノオ・ツキヨミ・大己貴(大國主命)の神たちである。

又、人が人を拜む、人も神になれるという日本人の思想信仰から人格神が生まれたのであるが、この人格神として、大和町内では応神天皇、神功皇后及びその妹、仲哀天皇、菅原道真等が祭られており、中でも菅原道真はこの人格神三十四のうち二十二の六十五%を占めている。

古代民族は、自然の中の天には天の神、地には地の神、田には田の神、山には山の神、川には川の神があるとし、それを心の拠り所として信仰し続けてきたのである。そしてその信仰が同時に「ふるさと」の心」でもあり、「日本人の心」でもあったのである。これらの神社のうち幾つかについて簡単に述べるが、「文化財」の史跡や石塔婆類の項にも幾らか記しているのでそこも参照されたい。

1 天神さん

天神さんは天満宮に祭られ、この辺では「オテージンさん」と呼んでいる。天満天神すなわち菅原道真のことである。本来「天神」というのは、国津神に対する天津神の総称で、各地に天神を祭った神社が多かったが、その天神が菅原道真を祭ったもの(天満宮)と解されるようになったのは平安末期からである。それは悲運な晩年を送った道真の怨霊がはたらいて、京都その他に悪い病気を流行させたと考えられ、北野の天神がその霊を鎮める役割を果たしたことに由来するという。やがて各地にあった天神社も御神体を道真に統一するようになったが、一方北野には古くから雷神の信仰があったため、道真の霊の活動は雷火をもって象徴され、その信仰が全国に及んで、天神と道真と雷神の信仰とが結び付いたものと考えられている。後には文道の大祖、学問の神様として敬まわれ、江戸時代には各地に末社が勧請されて、全国各地に天満宮が建てられるようになった。

2 権現さん

権現は「権化」で「権に現われる」という意味であり、神や仏が人々を救済するため、種々の姿をとつてこの世に現われることである。我が国においては、奈良時代の仏教興隆の頃から、仏や菩薩(仏の次の位)が権化をなすと考え、特に観世音菩薩は種々の姿で現われて人々の苦悩を救うとされた。

平安時代に入ると、日本の神々は仏の化身として現われたものだとする本地垂迹説が説かれ、仏教と神道の習合が行われて、菩薩の称号に代って権現の称号が用いられるようになった。

仏寺の様式を取り入れた神社建築を「権現造」といつている。

3 乙護社

乙護社の祭神は乙護法善神で、天竺（印度）の主、徳善大王十五番目の王子である。法力のために使役され、又仏法を守護するために示現する童形の鬼神を「護法」といつ。「乙」又は「若」といつのは幼童的な名を表わす接頭語である。乙護法は神通自在の人で、龍馬に乗り、虚空を駆けて東方に去られ、天竺の鬼門に当たる背振山にとびつかれた。（この山はこの時、龍馬が背を振って三度空に向かつていないたので、これは瑞相だということ背振山と名付けられたとか）

徳善大王の御後は弁財天の化身（生まれ代り）である。この大王夫婦は王子との別れを悲しまれ、龍樹菩薩に王子の行衛を尋ねられた。龍樹は「これより東、日本扶桑の国の西に当たる肥前の国背振山に垂跡されて（仏が衆生を済度するため本地から身を現わす）、衆生利益の大願を成就された」と答えた。その後、徳善大王・弁財天・乙護法らは仲よく背振山の神に祭られるようになった。伝教大師が渡唐の時、この乙護法善神は「色赤くして鬼神のごとし、左の御手に鉄の杖をつき」現われになったといふ。

（以上肥前州古跡縁起より抜粋要約）

この乙護法善神を祭ったのが大願寺の乙護社であり、大久保のは弁財天乙護社となっている。

4 八龍神社

池上の氏神で八大龍王も祭神となっている。妙法蓮華經の開巻第一に、仏の説教を聞きに諸天龍が

参列するが、その中に八大龍王すなわちナンダ・バナング・サガラ・ワスキ・トクサカ・アナバダ・マナシ・ウパラが挙げられている。そしてこの第五番目のトクサカというのが、乙護社の祭神の一である徳善ではなからうかと考えられている。トクサカは龍の一種で、乙護法が乗ってきたという龍馬そのものが、徳善という龍であったと考えられている。朋輩のワスキ龍王は阿蘇山の主と見られたこともあり、サガラ龍王は雷山で祭られている。（以上筒井満志氏の「中折歴史散歩」より抜粋）

5 山王さん

山王に山王社があるが、これは天台宗総本山延暦寺の鎮守神である山王権現に対する信仰としてのお宮である。山王権現は俗に山王又は日吉権現などともいわれている。延暦年間（七八二―八〇五）に僧最澄が延暦寺を開いた時、唐の天台山国清寺の山王祠の例にならい、比叡山守護の神としてここに山王の祠を建てたのが初まりだといわれる。山王はもともと霊山を守護する地主神をいい、山神の意味である。山王権現は中世以降天台宗にゆかりのある全国各地に勧請され、その数三千八百余社になった。又、山王は安産、子育て、縁結びの神としても信仰される。更に「山王の猿」として、猿をこの神の使いとしている。

6 貴船神社

西山田の鎮守である。京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社が本社でそれを勧請したものであろうか。祭神はクチオカミノ神で、この神は水の神である。雨乞いと止雨に靈験があるといふ。

7 諏訪神社

今山にある。建御名方富命・八坂力売命が祭神で、全国諏訪社の総本社は長野県諏訪市にある。建御名方富命はこの諏訪地方を開発した神といわれ、我が国最古の神社の一つである。諏訪大明神とも称され、信濃国の一の宮として、又狩猟、農耕などの神として崇敬されている。

8 三十番神社

三反田にある。三十番神は天台宗、日蓮宗では法華経の守護神という。慈覚大師（天台宗）が淳和天皇の天長六年（八二九）から三年の間、比叡山の横川、首楞（稜）巖院に草庵を作り、同八年の秋に草を筆とし石を墨として、心を静かに、一字三礼して法華経を書写した。この時に日本国内の有徳の神々は三十日の間、毎日順番に日を定めて、如法経書写の道場に列なつて法要を守護した。これらの神々を三十番神という。つまり、一日から三十日まで毎日守護してくれるということであろうか。そば屋で三十番神と書いた提灯を店先に掲げる所があるが、これは毎日善神守護を祈る表示であるという。

9 地主神

惣座にある。その土地を領知する神を地主神といい、神社、寺院等に古くから祭られているが、これらの神々はすべてその神社、寺院のある、限られた地区を支配する神として崇敬されている。とすればこの地主神社が惣座にあるということは、飛鳥時代にここに総社（歴史篇参照）があつたことから、総社を建てる時、その地に古から鎮座していた神を地主神とし、後鎮守社として創設したとも考えられる。

現在は大国主命が祭神になっている。

10 八坂神社

普通この辺では「オギオンさん」と呼んでいる。昔から祇園社・祇園天神・牛頭天王とも呼ばれ、本社は京都市祇園町の八坂神社である。本社はスサノオノミコト・その妃クシナダヒメ及びその御子神八柱を祭っており、全国の八坂神社はすべて本社を勧請したものである。七月の祇園会は有名であるが、これは八六九年悪病が流行した時、御霊会を営んだことに始まり、後各種芸能も加わり、山鉾等も加わつて祇園囃子がつき、日本における夏祭形式の一つとなり、各地の祭礼に大きな影響を与えた。

11 八幡社

八幡神を祭る神社を八幡宮という。普通応神天皇（誉田別尊）を主神に、左右に比売大神・神功皇后（大帯姫命）を配祀した三神一体の八幡神を祭るが、配祀の神が仲哀天皇・玉依姫命・住吉大神などであることもあり、応神天皇一神の場合もある。

我が国最古の八幡宮は宇佐神宮で、ここから全国に八幡信仰が伝わり、今日、全国の八幡宮は四万余社となっている。平安時代には石清水八幡宮が勧請され、国家・王城の守護神として神宮につく重要な社とされ、更に鎌倉時代には幕府が鶴岡八幡宮を勧請し、以来源氏だけでなく広く武家の守護神としてこの三つの八幡宮を中心に全国に広まった。八幡大菩薩というのは八幡神のことで、これは八幡神が菩薩地において仏果を修めつつあるということから菩薩号を奉進したものである。